平成 28 年度　附属小学校・附属中学校「教育相談室」活動報告

2016 University Elementary and Junior High School "educational counseling room" activity report

竹口　佳昭，小倉　正義

TAKEGUCHI Yoshiaki and OGURA Masayoshi

鳴門教育大学学校教育研究紀要

第 32 号

Bulletin of Center for Collaboration in Community
Naruto University of Education
No.32, Feb., 2018

研究報告

鳴門教育大学学校教育研究紀要　32，219 － 223

平成 28 年度　附属小学校・附属中学校「教育相談室」活動報告

2016 University Elementary and Junior High School "educational counseling room" activity report

竹口　佳昭，小倉　正義

〒 772 - 8502　鳴門市鳴門町高島字 748 番地　鳴門教育大学　生徒指導支援センター
TAKEGUCHI Yoshiaki and OGURA Masayoshi
Center for School Support of Guidance and Counseling
748 Nakajima, Takashima, Naruto-cho, Naruto-shi, 772-8502, Japan

抄録：鳴門教育大学の附属小学校・附属中学校では，平成 13 年度からスクールカウンセラー活動を行ってきている。平成 27 年度からは，生徒指導支援センターからスクールカウンセラーが派遣されるようになった。本報告では，附属小学校・附属中学校を中心とする「教育相談室」の活動に関して，平成 28 年度の活動内容，相談件数などについて報告し，成果と今後の課題を検討する。

キーワード：附属小学校・附属中学校　教育相談室　スクールカウンセラー実習　スクールカウンセラーだより　スクールカウンセラー授業

Abstract：School counselor activities have been carried out at Fuzoku Elementary School and Fuzoku Middle School Attached to Naruto University of Education since AY2001. From AY2015, school counselors have been dispatched from the Center for School Support of Guidance and Counseling. This report covers activity content, number of counseling cases, and other aspects of AY2016 activities and considers future challenges regarding the work of the "Educational Counseling Office" that primarily serves the elementary and middle schools.

Keywords：elementary school attached to university, middle school attached to university, educational counseling office, school counselor training, school counselor news, school counselor course

Ⅰ．はじめに

鳴門教育大学（以下，本学）の附属学校園では，附属小学校・附属中学校を中心として「教育相談室」が運営されている。

平成 13 年度から，附属学校園には本学の臨床心理士の資格をもっている教員がスクールカウンセラーとして配置されていた。平成 27 年度からは生徒指導支援センターの設置に伴い，生徒指導支援センター研究員の第一著者（竹口）が附属小学校･附属中学校の専属のスクールカウンセラーとして配置された。

本報告では，昨年度の報告と同様に，平成 28 年度の「教育相談室」活動を，附属小学校･附属中学校におけるスクールカウンセラーの活動，スクールカウンセラー実習，スクールカウンセラーだより，スクールカウンセラー授業の４点から報告する。

Ⅱ　スクールカウンセラーの活動

１．活動形態

第一著者が附属小学校に毎週金曜日に週１回 10 時から 17 時までの６時間，附属中学校に毎週水曜日に週１回 10 時から 17 時まで６時間，スクールカウンセラーの活動を行った。

スクールカウンセラーの活動は附属小学校・附属中学校とも教育相談室で行った。

２．活動回数，相談人数，相談件数，相談内容

活動回数は，附属小学校が 40 回，附属中学校が 37 回であった。

平成 28 年度のスクールカウンセラーの相談人数，相談回数は表１・表２の通りである。

１）附属小学校での相談について

附属小学校の相談人数は，全体で 46 名であった。内訳は児童が８名，保護者が 23 名，教職員が 15 名である。なお，昼休みや放課後に遊びに来室した人数は含まれていない。

表１　平成 28 年度の小学校の相談人数・相談回数

面接の対象	相談人数	相談回数
児　童	8 名	18 回
保護者	23 名	81 回
教職員	15 名	58 回
計	46 名	157 回

＊　家庭訪問　5 回

表２　平成 28 年度の中学校の相談人数・相談回数

面接の対象	相談人数	相談回数
生　徒	8 名	42 回
保護者	8 名	47 回
教職員	11 名	55 回
計	27 名	144 回

＊　授業４クラス

相談回数は, のべ 157 回であった。このうち児童が 18 回，保護者が 81 回，教職員が 58 回であった。なお，養護教諭は毎回情報交換をしているので，このデータには含まれていない（表１）。相談人数･相談回数ともに，平成 27 年度（相談人数 37 名･相談回数 125 回）と比較して増えていた。

児童の相談件数は８件で，相談内容は親子関係・いじめ・不登校についての相談が各２件で，学習・友人関係についての相談が各１件であった。

保護者からの相談は 23 件で, 相談内容は子育てについての相談が 12 件と最も多く，不登校・親子関係についての相談が各３件，友人関係についての相談が２件，身体症状･いじめ･人間関係についての相談が各１件であった。

２）附属中学校での相談について

附属中学校の相談人数は，全体で 27 名であった。内訳は生徒が８名，保護者が８名，教職員 11 名であった。

相談回数は, のべ 144 回であった。この中で生徒は 42 回，保護者が 47 回，教職員が 55 回であった。なお，養護教諭は毎回情報交換をしているので，このデータには含まれていない（表２）。相談回数は，平成 27 年度（相談人数 27 名・相談回数 139 回）と比較して増えていた。

生徒の相談件数は８件で，相談内容は友人関係の相談が３件と最も多く，親子関係についての相談が２件，不登校・いじめ・先生との関係についての相談が各１件であった。

保護者の相談件数は８件で，相談内容は人間関係についての相談が３件，子育て・いじめについての相談が各２件，不登校についての相談が１件であった。

３．活動内容

１）活動内容の概要

附属小学校の活動内容は，児童・保護者との個別面接, 教員へのコンサルテーション，昼休みや放課後の児童とのプレイ，授業中の行動観察，個別学習支援，給食時間の昼食参加，不登校児童宅へ家庭訪問，いじめについての研修会である。

附属中学校の活動内容は，生徒・保護者との個別面談, 教員へのコンサルテーション,「いじめ」の授業，生徒指導委員会への参加である。

２）生徒指導委員会（附属中学校）

活動内容の概要に述べた生徒指導委員会について，以下に述べる。

①　組織

生徒がよりよい方向に成長するように，教員が生徒により効果的な指導を行う方法について話し合う目的で発足した。構成員は，学校長，教頭，主幹教諭，生徒指導主事，該当生徒の学年主任及び担任，養護教諭，鳴門教育大学いじめ防止支援機構長，第一著者である。なお, 鳴門教育大学いじめ防止支援機構長と第一著者は，平成 27 年度から参加した。

②　会合及び内容

会合は年１回，２時間半程度行われる。各学年の担任から指導援助を特に必要とする生徒についての関わりの経過等が報告され, 質疑応答が行われる。その後，　鳴門教育大学いじめ防止支援機構長が生徒指導の立場から指導助言を，第一著者が臨床心理学的な立場から，生徒や保護者や教員の心の動き等について助言をする。

Ⅲ　スクールカウンセラー実習

本学臨床心理士養成コースの実習の一つとして，スクールカウンセラー実習があるが, 平成 27 年度から附属学校園でもスクールカウンセラー実習の受け入れを開始した。２年目である平成 28 年度は，附属中学校で２名, 附属小学校で１名が実習を行った。

附属中学校の２名は，スクールカウンセラーの面接に陪席して交互に記録をとった。教育相談室に来室した, 様々な問題を抱えた生徒とゲームをしながら楽しみ，また時にはその生徒の内面に迫るような話をしながら，こころの交流の図り方を学んだ。

附属小学校の１名も，スクールカウンセラーの面接に陪席して記録をとった。放課後，児童の個別学習支援をしたり，ゲームをしたりして，学習や会話を通して児童とこころの交流の図り方を学んだ。

空き時間には，教員の職務内容やスクールカウンセラーの心構え，面接の振り返り等を行った。毎回，実習ノートに記録，感想を記入し，第一著者がコメントした。

ある実習生は,「現場でしか学べないことを数多く学べた」と感想に記入していた。学校の文化を肌で感じることができることはこれからスクールカウンセラーになる大学院生にとっては大きな糧となる。

Ⅳ　スクールカウンセラーだより

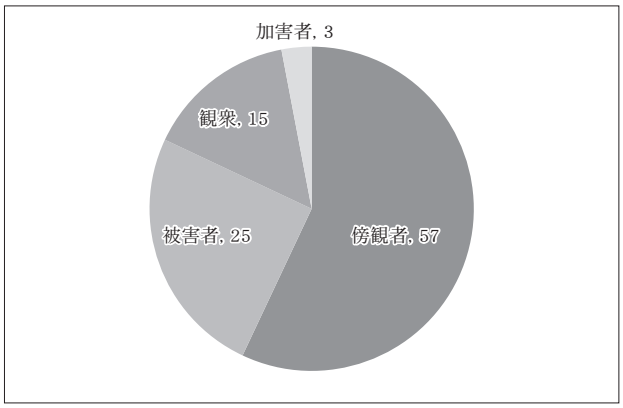
毎月１回「スクールカウンセラーだより」(巻末資料１)を計11回発行し，児童・生徒一人ひとりに配布した。これはスクールカウンセラーの活動や勤務日を保護者や児童・生徒に周知することと，　児童期・思春期のこころの動きや他人との関わり方や心理学の考え方を紹介することで，スクールカウンセラーに興味・関心を持ってもらうことを目的とした。

「スクールカウンセラーだより」である『こころころころ』の発行を楽しみにしている保護者や教員がいると養護教諭から耳に挟んだ。保護者・児童・生徒の相談回数が昨年に比べ増えた理由の１つに，スクールカウンセラーだよりがあると思われる。

Ⅴ　スクールカウンセラー授業

五十嵐かおる原作の「いじめ」というマンガ｛陸上部女子部長の日富（加害者）が陸上部員の実咲（被害者）をいじめるという設定。実咲の友だちの優花とまあちゃん（傍観者）･陸上部員（観衆）等が登場人物｝を第一著者が教材化し，生徒と距離感を縮めるために，それを用いて附属中学校の２年生４クラスで授業を行った（資料１）。

（資料１）　いじめ教材の一部



（資料２）　どの立場がいじめを解決すべきですか

様々な立場の苦悩を理解した上で，どの立場の生徒がいじめを解決すべきかについて考えた（資料２）。

〈解決すべき立場と意見の一部〉
（傍観者：57%）
・優花とまあちゃん（傍観者）が実咲（被害者）と一緒にいて味方する
・優花とまあちゃん（傍観者）が他の陸上部員（観衆）にいじめをすることはおかしいと伝える
（被害者：25%）
・実咲（被害者）が先生や親や大人や友だちや男子部長やカウンセラーに助けを求める
・『やめて』って言う
（観衆：15%）
・陸上部員（観衆）がもうやめようという雰囲気になれば，いじめはなくなる
（加害者：３%）
・日富（加害者）がいじめてもいじめても起き上がってくる実咲（被害者）を見て，感動して「悪かった」と言って終わる
〈生徒の感想〉
・解決方法がたくさんあることに気づけた
・解決方法を実践することの大切さに気づいた
・被害者の周りの人々がどう行動するかで，けっこうかわることがわかった
〈授業者の感想〉
・授業をすることで，相談室では見ることのできない生徒の姿が見られた
・自分が強くあらねばという思いが強い生徒が多い。だから，被害者が自らいじめを解決すべきだという考えが多くなる。そういう生徒は，気が張りつめて人に優しく接しにくいのかもしれない。肩の力を抜いて生きていく生き方もあるということを次回は学ばせたい

Ⅵ　成果と今後の課題

上記の活動を通して感じた平成28年度のスクールカウンセラー活動の成果と課題について，下記に述べる。

１．成果

①　第一著者にいじめを訴えてきた児童の気持ちや思いを当該児童の学年の先生方と共有した。学年の先生方と第一著者が今後の方針をじっくり話し合い，学年全体でいじめに対して取り組んだ結果，数年続いていたいじめがなくなった。（３ヶ月以上継続）

②　附属小学校・附属中学校の不登校児童・生徒は，全国平均の1.9%（文部科学省2015）に比べて下回る。

その少ない不登校の児童・生徒や保護者と面接ができ，保護者の心の安定につながった。

③　教員は，第一著者にコンサルテーションを受けることで，今後の指導の方向性を確認でき，安心感が増した。

④　第一著者が「いじめ」の授業をすることで，生徒と気軽に笑顔で挨拶できる関係性を築けた。

⑤　附属小学校では，スクールカウンセラー実習生が学習の苦手な児童の学習支援を行った。その中で関係性の作り方を学び，自分に自信が持てるようになり明るく学校生活を送ることができるようになった。

２．課題

神田橋（2006）はスクールカウンセリングの要は有用な情報の発掘と伝達であると述べている。第一著者は附属小学校と附属中学校に勤務しているので，時間軸で教員と違った立場から児童生徒と触れ合うことができる。そこで得た感覚を教員にもっと伝えたい。そうすることが，馬殿（2012）のいう多様な視点でサポートするシステムを構築するために，校内資源の校内カウンセリング・パワーを結集し，活性化を図り，協働することにつながっていくことになる。

以下に，今後の課題について述べる。第一に，スクールカウンセラーと教員が，職員室で雑談できるような関係性を構築し，子どもたちが元気で楽しい学校生活を送ることができるように，スクールカウンセラーがより積極的に動いて子どもたちのプラス面を伝えていきたい。

第二に，各学校別の課題を述べる。まず，附属中学校では，生徒指導委員会の回数を増やし，子どもたちの成長のために役立てたい。次に，附属小学校では，附属中学校の生徒指導委員会にあたる教員の負担が軽減するような児童理解のための会を持ちたい。

第三に，予防的な活動として，ストレスマネジメント教育等を行っていきたい。親の期待に応えようとして黙々と頑張り続けている児童・生徒がたくさんいる。彼らの中にはストレスが溜まり，それを上手に出せない子どももいる。そのような子どもたちにストレスと上手くつきあっていくための機会を設けたい。

【引用文献】

馬殿禮子（2012），『現場で役立つスクールカウンセリング』，村山正治・滝口俊子編，創元社，pp.48 － 60

神田橋條治（2006），『スクールカウンセリングモデル100』，かしまえりこ・神田橋條治　創元社，pp.82 － 86

文部科学省初等中等教育局児童生徒課（2017年７月）『生徒指導上の諸問題の現状と文部科学省の施策について』pp.113

こころころころ

2017，4，12（水）
付属小学校　　スクールカウンセラー通信
竹口　佳昭

自分を大切に！

ご入学、ご進級おめでとうございます。

新たな気持ちで、大きな期待に胸を膨らませ、ちょっぴり不安も抱えながら、新学期を迎えられたことと思います。新しい担任の先生はどんな先生かなあ。自分のことをわかってくれる先生かなあ。知っている友達はいるかなあ。早く、新しい友達ができればいいのになあ。できるかなあ。

そんな不安を吹き飛ばすくらいの、新たな気持ちで今年 1 年頑張るぞ！と、強い決意を持って臨んでいることでしょう。その気持ちを忘れないで、1 年を過ごしてほしいと思います。

私たちは、日々生活をしていると、様々な予期しない出来事に遭遇します。そのような出来事をしっかり受け止めたり、かわしたりしていく必要があります。

困ったときには、家族や友達や先生などに相談することがとても大切です。それらの人たちに相談しにくいことは、スクールカウンセラーに相談するのも 1 つの方法です。とにかく、自分で解決できることは自分で解決し、自分での解決が困難な時は、誰かに相談することがとても大切です。

誰かに相談することで、自分の本当の思いに気づいたり、考えがまとまったり、新たな視点に気づくこともあります。新たな道が見えてくるのです。そして一緒に歩むことができます。一人で歩むより、心強いものです。

人は一人では生きていくことは難しいものです。助け合いながら歩む方が楽なように思います。

Travis　Bradberry が挙げた精神的に強い人の特徴の一部が下の通りです。

失敗にこだわらない。自分の失敗を頭の片隅にとどめておき、将来の成功に向けて自分を変え、適応させていくために、その失敗を役立てる。

自分を疑わない。精神力の強い人には忍耐力がある。失敗しても、面白くなくても、あきらめることはない。誰かに『無理だ』と言われても、それは他人の意見だと受け止める。

謝罪を求めない。非を認めず、謝らない人のことを恨まずに許す。そうすれば円滑に物事が進む。過去の恨み事や感情に『寄生』する憎しみや怒りは、今の幸せや喜びを台無しにする。

比較しない。自分の行動に前向きな感情を持っているとき、他人の成功や意見に影響されることはない。

人のことに介入しない。他人を批判しない。人の能力はそれぞれ異なる。嫉妬することにエネルギーを浪費せず、人を理解することにそのエネルギーを使ってみよう。人の成功を祝福することは、あなたにとっても、その人にとってもプラスになる。

4 月来校予定

14 日(金)　・　21 日(金)　・　28 日(金)　　10:00～17:00

（巻末資料１）